昔から海外の大学で教える機会が多いんですが、１９９０年代の終わりごろ、あることに気づいたんです。日本のマンガやアニメの話をすると、学生の目の色が急に変わる。授業が終わってもワーッと集まってきて、質問攻めになるんです。おお、これは本気だなと（笑）。「こんどイベントがあるんです」と教えてくれる学生もいて、行ってみるとコスプレの大集団です。まずはその熱気に驚きました。こういう巨大な現象が世界中で起きているわけですね。私は社会学のなかでも理論のほうをやってきた研究者ですが、これは理論的にもおもしろいなと思いました。

社会学の伝統的な理論のひとつに「共通価値」があります。人々が基本的な価値を共有し内在化することによって、秩序ある共同体を保存していく。これが社会学の基本なんですが、現代の問題は、そういう共通価値が崩れていることです。さらに、共通価値なんて日本には最初からなかったという議論もあります。共通価値がないのに秩序は保たれているぞと。こうなると社会学は存続の危機です（笑）。

一方、社会学の先端的な考え方のひとつに「ヴィジュアル・ターン」という理論があります。人と人とをつなぐのは共通価値だけではない。芸術、有名人、家族写真などのヴィジュアルなもの、視覚的なアイコンによってつながることもありますねと。

2011年、中国・杭州市で開催されたマンガアニメフェスティバルにおける調査の様子

●

そのひとつの事例として、マンガ・アニメがあるわけです。たとえば誰かが『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』の主人公ルフィのコスプレをしていると、あの作品を知っている人は、ぱっと見ただけで共感できるんです。「すばらしかった」「感動した」という気持ちが、ヴィジュアルなものでつながる、わかりあえる。こういうコミュニケーションのしかた、人と人とのつながり方が、現代社会では一般的になっているんですね。

この現象について、みなさん意見はもっているんです。それぞれに一面をとらえているし、おもしろい議論がいくつもあります。ところが、社会科学としての総体的な説明はなかった。あれだけのエネルギーがどこから出てくるのか、日本の研究者は説明する立場にあると思うんです。これはいちど、大々的な調査研究をしなければならないなと。

そこで、２０１０年に「日本サブカルチャー研究会」を立ち上げ、中国、香港、台湾で意識調査を行いました。マンガ・アニメにふれたことで、家族や仲間との関係、日常生活、日本のイメージなどがどう変わったか、変わっていないのか。この少し前、フランスのパリ政治学院に本部を置く「ヨーロッパ・マンガ・ネットワーク」が同様の調査をしていたので、比較研究のためにそのデータも共有しました。

●

マンガ・アニメをきっかけにして、日本文化に興味をもつ若者もたくさんいます。神戸大学に来ている留学生の多くもそうですね。英語での授業でマンガやアニメの話をすると、みんな何か言うことがある（笑）。オックスフォードだろうが、イスラム圏だろうが、アジアだろうが関係ない。ヴィジュアルなものでわかっているから、すぐに話が盛り上がるんです。

宗教のような価値を共有しづらくなっているなかで、感情のレベルで共有できるものは何か、みんな探していると思うんですね。マンガ・アニメはインパクトがあるし、日本の作品はストーリーが深いので、どんどん入り込んでいく。その感動を共有することで、地球の裏側の人ともつながるということが、すでに現実としてあるわけです。

来年４月には、全学の先生方とのコラボで「現代日本プログラム（仮）」を立ち上げる予定です。世界のなかで日本はどう受け入れられているか、日本の文化や社会の経験は世界にとってどういう意味があるのか。その中心テーマのひとつがマンガ・アニメ。学外や海外の研究者も参加する、新しい日本研究として取り組みたいと思っています。